



Title	ポルトガル語におけるフランス語起源と英語起源の外来語
Author(s)	鳥居, 玲奈
Citation	ブラジル研究. 2009, 5, p. 67-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106452
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポルトガル語におけるフランス語起源と 英語起源の外来語¹

鳥居 玲奈

1. はじめに

今日、多くの英語起源の外来語がブラジルのポルトガル語に取り入れられている。このような状況の中、本稿では、これまでフランス語の影響が強かったファッション分野にまでその影響が広がっているのかを検証するため、フランス語起源と英語起源の外来語のここ数年間の変化を調査した。

Freitas (1991) では、1979 年 1 月から 1989 年 12 月にかけて女性向けファッション誌を対象にフランス語起源と英語起源の外来語の調査を行っている。その結果、フランス語起源の外来語と英語起源の外来語の数がほぼ同数であったことが報告されている。この調査からおおよそ 14 年後、同種のコーパスを用いて調査を行い、その相違を探ることにする。

2. 用語の定義

いかなる言語でも、生きた言語である以上、社会的、文化的変化に応じて絶えず変化するものである。Guilbert (1975) によると、言語体系は大きく文法 (gramática) と語彙 (léxico) の領域に分けられ、前者は閉じた体系、後者

は開いた体系を成している。それゆえ、言語変化は文法面より語彙面においてより顕著に現れる。

しかしながら、語彙における個々の語 (unidade lexical) 全てが常に変化を伴うのかというとそうではなく、語彙にも変化を受けやすい部分とそうでない部分がある。語彙は機能語 (palavra gramatical) と内容語 (palavra lexical) で構成されている。前者は前置詞、接続詞、代名詞、冠詞などの文法的機能を持つ語であるのに対し、後者は名詞、動詞、形容詞といった意味的内容を持ち、言語外の世界を表現する語である。内容語はさらに形態素 (morfema) と語彙素 (lexema) に分類され、前者は文法的な意味、後者は語彙的な意味を担う部分であり、最も変化を受けやすいのは、より開いた体系を成す語彙素であることがわかる。

Alves (2002) によると、語彙における変化には、ある語が廃れていく古語 (arcaísmo) と新たな語が造られる新語 (neologismo) の2通りのプロセスがあるという。そして、新語には、自国語の要素から新たな語を造るプロセスと、外国語から語を借用するプロセスがあり、ポルトガル語では通時的、共時的にも、どちらも広く用いられている。この後者のプロセスは言語接触により起こる現象で、一般的に外来語あるいは借用語と呼ばれているものである。

外来語と借用語は広義には同義で用いられることもあれば、異なる概念として捉えられることもある。日本では、狭義には借用語は漢語を指し、欧米諸国から入った語は外来語と定義されることがしばしばある。しかしながら、田中 (2002) によれば、これらの用語の相違点は借用元の言語にあるというよりも、借用先の言語への同化の度合いにあるという。つまり、借用先の言語に定着して同化の進んでいるものが借用語であり、そうでないものが外来語であるという。このように、狭義において両者は異なる意味を持つことがあるが、本稿は外来語の定着度を議論の直接の対象としているわけではないため、借用元の言語や定着度がいかなる場合においても、外国語から取り入れられた語は全て外来語と呼ぶことにする。

3. フランス語と英語起源の外来語の背景

フランス語起源の外来語 (galicismo) は、中世以降、頻繁にポルトガル語に取り入れられるようになった。この時期のフランス語起源の外来語は、プロヴァンス地方の吟遊詩の影響により、jogral, trovador, linhagem, viagem といったものが挙げられる。中世を過ぎた後もフランスはヨーロッパ全土で文化的中心地であり続けた。とりわけ 18 世紀から 20 世紀初頭にかけては、世界中の国々がフランス文化を手本とし、ファッション、芸術、社会生活といった様々な面でフランス語を取り入れた。この時期には、godê, evasê, chique, tailleur, elegante, art déco, silhueta, menu, carnê などといったような語が新たにポルトガル語の語彙へと加わっていった²。

一方、初期の英語起源の外来語 (anglicismo) はイギリスからポルトガル語に取り入れられた。イギリスに政治経済面で強い影響を受けていたポルトガルにもたらされた外来語は、その後ブラジルへと渡った。例えば、bife, rosbife, lanche, vagão, pudim, túnel, rum, esporte などはその頃に導入された外来語である。その後、政治の中心地がヨーロッパからアメリカに移ると、英語起源の外来語もまたアメリカからもたらされるようになった。20 世紀後半になり、ブラジルやその他の第三世界の国々が工業化の時代へと突入すると、政治、経済、技術面においてアメリカ合衆国へ依存するようになり、それと同時に庶民の生活もアメリカの影響を大きく受けるようになった。こうして、映画、音楽、テレビ、インターネットなどのあらゆるメディアを通して新たな外来語がポルトガルを介さずに直接ブラジルのポルトガル語に導入されるようになったのである³。

このような背景から、Carvalho (1989) は、ブラジルとポルトガルでは、外来語に対する姿勢が異なるという。使用されている外来語が異なることもあれば、外来語が同じ場合でも同化の度合いが異なることもあると述べている。例えば、gay や stress⁴ のような語は、ブラジルのポルトガル語では広く用いられているが、ヨーロッパのポルトガル語ではあまり歓迎されない傾向にある

という。また、ブラジルでは、英語起源の *mouse* (コンピューター用語)、*Aids* といった外来語を原語のまま使用するのに対して、ポルトガルでは、既存する *rato* という語に新たな意味を加える意味借用や、ポルトガル語での翻訳表現から頭文字をとって *Sida* と表記する翻訳借用がとられることもあり、ブラジルとポルトガルで同化方法が異なることがある。ヨーロッパのポルトガル語におけるフランス語と英語起源の外来語については4節で再び取り上げることとし、次節からは、Freitas (1991) の先行研究をもとに、ブラジルのポルトガル語におけるフランス語と英語起源の外来語の現状をまとめていくことにする。

3. 資料調査と分析

3.1 資料

Freitas (1991) では、1979 年 1 月から 1989 年 12 月までにブラジルで発行された女性ファッション誌 *Manequim* 101 冊をもとに、そこから収集したフランス語と英語起源の外来語の状況を調査している。

一方、今回の調査では、2003 年 12 月から 2004 年 8 月までにブラジルで発行された 2 種類の女性ファッション誌 *Vogue Brasil* と *Elle Brasil*⁵ をコーパスとして用い、その中から抽出したフランス語と英語起源の外来語を調査の対象とした。大半はファッション分野の語であったが、映画、音楽、旅行、料理といったそれぞれの雑誌で取り上げられていた分野からの外来語も分析に含めた。なお、対象となった雑誌の総数は 14 冊である。

3.2 調査結果

Freitas (1991) での調査結果と今回の調査結果をそれぞれ表 1、表 2 に示した。いずれの調査でも使用頻度の問題は扱われていないため、以下に示された数字は全て異なり語数である。しかし、*wanabe* や *wannabe* のように外来語の表記が異なる場合や *o* *flagship* (男性名詞) や *a* *flagship* (女性名詞) のように何らかの形態的特徴が異なる場合は別の語として計算されている。

表 1 : *Manequim* におけるフランス語と英語起源の外来語の総数 (Freitas 1991:60)

	フランス語	英語
<i>Manequim</i>	236 (46%)	277 (54%)

表 2 : *Vogue Brasil* と *Elle Brasil* におけるフランス語と英語起源の外来語の総数

	フランス語	英語
<i>Vogue Brasil</i>	107 (20%)	421 (80%)
<i>Elle Brasil</i>	38 (19%)	157 (81%)
計	145	578

*括弧内の数値は割合 (%) を示す。

これらの結果を見ると、表 1 ではフランス語と英語起源の外来語の数が近い値となっているのに対し、表 2 では、どちらの雑誌でも英語の外来語の数がフランス語の外来語の数を圧倒的に上回っていることが一目瞭然である。しかし、ここで、Freitas (1991) の調査と今回の調査では、以下の条件が異なっていることを述べておく必要がある。

- (a) 同種のコーパスとはいえ、使用した雑誌が異なっている。
- (b) Freitas (1991) の調査では翻訳借用も総数に含まれているのに対し、今回の調査ではそれが含まれていない。
- (c) Freitas (1991) の調査では辞書に記載されている語も含まれているが、今回の調査ではブラジルのポルトガル語辞典 *O Novo Aurélio Século XXI: o Dicionário da Língua Portuguesa* (1999) と *Dicionário Houaiss da Língua Portuguesa* (2001) に記載がない語、あるいは語義や何らかの形態上の記載内容が異なる語だけを調査の対象としている。

上記の理由から、決して公正な比較とは言えないかもしれない。しかし、(b) については、Freitas (1991) で観察された翻訳借用の用例は全体でわずか 7 語だけであり、また、(c) についても、用例を見ると辞書に記載のない語の方が圧倒的に多いことが窺える。したがって、この結果からある程度の傾向は見て取れると判断できるであろう。その傾向とは、すなわち、もともとフランス語からの外来語が多いとされていたファッション分野でさえも、英語からの外来語が増加しているという傾向である。Freitas (1991) の調査が行われた時点ではフランス語と英語の数量的な違いはほんのわずかで、英語が若干多い程度であったが、今回の調査では、いずれの雑誌でもその差が大幅に広がり、ファッション分野においても英語が主流となって来ていることが読み取れるであろう。

今回の調査で用いたコーパスの用例を次の規準で分類し、そのうちのいくつかを取り上げて次節より詳しくみていこうと思う。ただし、本稿で扱うコーパスは全て書き言葉をもとにしているため、ここでいう同化とは主に形態統語上と表記上の同化を指し、場合によっては意味上の同化を含むものとする。

①原語の語形を維持し、借用先言語の同化を受けていないもの。

②借用先言語に何らかの形で同化を受けたもの。

3.3 借用先言語の同化を受けていない外来語

コーパスから収集された用例のほとんどは名詞であり、形容詞中にはいくつか見られた。しかし、動詞の数は非常に限定されていた。また、大半の外来語は原語の品詞を維持していたが、以下の例のように、原語では形容詞や動詞として用いられているものが、ポルトガル語では名詞として用いられているものもいくつか見られた。なお、イタリック体や引用符は原文のままであるため、本稿で対象とする外来語は下線で示すことにする。

- (1) “Isabela Capeto exercitou o handmade com inteligência. (*Elle Brasil* 8, p.109)
- (2) Acho que o timeless, que dure (...) (*Vogue Brasil* 312, p.62)
- (3) (...) tornando-se ecléticas e monos padronizadas num exercício próximo ao express yourself requerido hoje. (*Vogue Brasil* 307, p.44)

大半の用例はポルトガル語の同化を受けていないものであった。そのうち、英語起源の外来語でイタリック体や引用符や大文字の使用が見られたのが、*Vogue Brasil* では全体のおよそ 33%で、*Elle Brasil* ではわずか 8%であった。フランス語起源では、*Vogue Brasil* でおよそ 60%、*Elle Brasil* でおよそ 18%であった。いずれの雑誌においても、英語よりもフランス語起源の外来語に表記上の措置が施されていた。このことから、読者にとって、英語起源の外来語の方がより身近で理解しやすく、フランス語起源の外来語はより不明瞭なものになっていると言えるであろう。

また、以下の (4) から (11) のように、すでに借用元の言語で構成された複合語⁶が、そのままポルトガル語に導入された用例が多く見られた。中にはハイフンでつながれたものもあればそうでないものもあり、場合によっては同じ外来語でも (10)、(11) のようにどちらの形でも用いられているものもあった。

- (4) (...) que será mais um road movie, seu gênero preferido. (*Elle Brasil* 7, p.93)
- (5) Business center completo e um health club com piscina (...) (*Vogue Brasil* 311, p.223)
- (6) (...) uma personagem que tinha inclusive um physique du role diferente do meu”, (...) (*Vogue Brasil* 308, p.62)
- (7) (...), usar baby-liss ou bobes médicos (...) (*Elle Brasil* 3, p.46)
- (8) Para encarnar a serial killer, ficou irreconhecível. (*Elle Brasil* 4, p.60)
- (9) O grand monde vem com o estilista italiano, (...) (*Elle Brasil* 6, p.72)

- (10) (...): xadrez com tie dye, *argyle* (desenho de losangos) (...) (*Elle Brasil* 3, p.127)
- (11) Camisetas grafitadas, desenhadas, paetizadas, seringrafadas, tie-dye, com slogans.
(*Elle Brasil* 5, p.70)

(12) から (14) のように、フランス語起源の外来語と英語の起源の外来語で構成された複合語も見られた。

- (12) Os trajes mostrados por cima, entretanto, em grandes parte permaneceram fieis ao classic chic parisiense (...) (*Vogue Brasil* 306, p.138)
- (13) É o girlie chic elaborado, sofisticado, ornado, meio “too much”, “cool” e encantador, (...) (*Vogue Brasil* 310, p.79)
- (14) (...) a casual chic da Tod’s e Hogan, marcas do megaempresário (...) (*Elle Brasil* 7, p.64)

それぞれの外来語を詳しく見ていくと、ここ数年間における語の変遷が窺えるものがある。例えば casual がその1つである。*Vogue Brasil* と *Elle Brasil* では casual の付く複合語が頻繁に見られたが、Freitas (1991) では、(15) の1語だけしか見られなかった。

- (15) O colete serve para criar um estilo que os ingleses chamam de “casual”, uma espécie de displicência planejada. (*Manequim* 88 年 7 月号 p.49, Freitas より引用)
- (16) Tudo num clima casual chique. (*Vogue Brasil* 311, p.174)
- (17) As peças femininas dividem-se em temas: *cityscape*, casual diva, *cool comfort*, *natural exposure*, *heat wave*, *free zone*... (*Vogue Brasil* 308, p.82)
- (18) (...), nossa prévia de outono-inverno junta o casual sexy (...) (*Vogue Brasil* 308, p.13)
- (19) (...) quem dirá um casual sex tipo Samantha em *Sex and the city*. (*Elle Brasil* 3,

本来 *casual* はラテン語起源の語であり、ここ数年で新しくポルトガル語に取り入れられたものではない。しかし、(15) の用例を見ると、*casual* の後にその概念がパラフレーズされている上、引用符が付加されている。そのことから、“*displícência planejada*”という概念で *casual* を用いることは、88年にはまだ比較的新しいことであつたと推測される。その後、ファッション業界では頻繁に使用されるようになり、現在では複合語が用いられるまでに至っていると考えられる。Houaiss (2001) には、*casual* の見出しに“*uso informal*”という語義での記載がすでにあり、それは英語からの意味借用によって取り入れられた概念だと説明されている。また、その語義ではブラジルのポルトガル語でのみ使用されていると追記されている。実際、ヨーロッパのポルトガル語の辞書である *Grande Dicionário* (2004) にはその語義での記載はない。

また、今回の調査の用例では、(20) から (26) のように、規模が大きいことを表すギリシア語起源の接頭辞 *mega-*を伴った語が頻繁に現れた。

(20) Pioneira de uma geração de megastars, (...) (*Vogue Brasil* 306, p.38)

(21) (...), porém, o mês temático da megastore se chama (...) (*Vogue Brasil* 310, p.54)

(22) (...), a mega boutique de marvas importadas do Paris, (...) (*Vogue Brasil* 309, p.173)

(23) Você já raspou a cabeça, usou megahair, ficou morena. (*Elle Brasil* 7, p.89)

(24) O Serravalle é o primeiro megaoutlet italiano, (...) (*Elle Brasil* 7, p.64)

(25) (...) – um dos megashoppings a céu aberto (...) (*Elle Brasil* 7, p.60)

(26) (...), a megatop Fernanda Tavares é um dos maiores ícones (...) (*Elle Brasil* 4, p.83)

Biderman (1996) によると、これまで *mega-*は主に科学技術分野の語を構成するために用いられていたが、現代のポルトガル語ではその特性を失い、より

一般化しつつあるという。また、mega-は、ここ最近までより頻繁に用いられていた super-や ultra-といったラテン語起源の接頭辞の代わりに用いられるようになっていとも述べられている。Freitas (1991) のコーパスでは mega-が用いられた用例は 1 例しか見当たらなかったことから、この変化はここ数年のものであり、ファッション分野においても mega-の使用が拡大している傾向が見られると言えるであろう。

また、いくつかの用例から、当時と現在の流行の変化が窺えるものもあった。例えば、Freitas (1991) では (27) から (31) の用例のように、ストーンウォッシュジーンズに関連した語が頻繁に表れていたが、今回のコーパスでは 1 例しかなかった。このことから、ブラジルで 80 年代はストーンウォッシュが流行した時期であったことが窺える。また、使用頻度が高かったのか、(31)のような *stonado* といった過去分詞形 (または形容詞形) までの使用されるようになっていた。

- (27) no centro, black jeans stone washed. (*Manequim*, 87 年 5 月, p.37, Freitas より引用)
- (28) o floral da malha dela e o jeans stone washed dele. (*Manequim*, 88 年 7 月, p.26, Freitas より引用)
- (29) ou pela praticidade do stone washed. (*Manequim*, 82 年 7 月, p.28, Freitas より引用)
- (30) os novos jeans (black, color e stone lavado). (*Manequim*, 87 年 5 月, p.19, Luz より引用)
- (31) o jeans voltou à sua cor de origem, depois de ser muito bem lavado, tingido, desbotado e “stonado”. (*Manequim*, 88 年 9 月, p.11, Freitas より引用)

80 年代にも現在においても同じ形で用いられている語もしばしば見受けられた。それらは、look のように Houaiss (2001) や Aurélio (1999) に既に記載のあるものもあれば、mix のように、どちらのコーパスでも用いられていた

ものの、まだ辞書化されていないものも見られた。

3.4 借用先の言語の同化を受けた外来語

数量的には多くはなかったものの、表記上、形態統語上の同化を受けた外来語がいくつか観察された。

まずは、原語の表記が変化したものの用例をいくつか見てみることにする。

(32) A de Alice, mais teen, de tenager. (*Vogue Brasil* 311, p.44)

(33) O que a deixa de mau humor? Wanabes, arrogância. (*Vogue Brasil* 311, p.10)

(34) (...) como chifon e o tule, (...) (*Vogue Brasil* 313, p.103)

(35) (...) um humilde vestido de musseline (chamado de Gaulle) e (...) (*Vogue Brasil* 313, p.165)

(36) Uma inovação oposta à art nouveau que todos faziam (...) (*Elle Brasil* 4, p.45)

(37) Entre no jogo de tons degradê. (*Elle Brasil* 5, p.136)

(38) (...): túnica de veludo devorê Doc Dog. (*Ele Brasil* 6, p.20)

(32) から (34) は、重なる母音や子音の1部が脱落したものである。(32) の *tenager* は、「13 才から 19 才までの若者」を意味する英語の *teenager* から来た外来語で、重なる母音 *ee* の1つが落ちたものである。また、(33) では *wannabe* の重なる *nn* が落ち *wanabe* と表記されている。(34) でも同様に、本来はフランス語で *chiffon* と綴られるが、子音の1つが落ちて *chifon* という表記になっている。

フランス語起源の (35) の *musseline* と (36) の *nouveau* では、原語の表記は *mousseline*, *nouveau* であり、どちらの場合も、二重母音 *ou* はフランス語では *[u]* の発音になる。しかしながら、(35) では *ou* が *u* で綴られているのに対し、(36) では *o* で綴られている。前者は発音が表記に反映したと考えられ、後者はポルトガル語の *novu* の表記が影響したものではないかと思われる。

(37) と (38) はフランス語の過去分詞形 *dégradés* と *dévoré* に由来するものであるが、いずれも *degradê*, *devorê* のようにアクセント記号の変化に加え、

(38) では、tons という複数名詞を修飾しているにもかかわらず、数の一致が欠如している。

派生による同化もいくつか観察されたが、なかでも一番多かったのが、(39) や (40) の用例のように、過去分詞（形容詞）を作る接尾辞 *ado* の付与であった。次の (41) と (42) はいずれもフランス語の *pailletté* に由来し、既にポルトガル語の語彙の一部を成す *paetê* から派生したと思われるが、一方は *-ar* が付与された *paetar* から、もう一方は、*-izar* が付与された *paetizar* から過去分詞形が形成されたと思われる⁷。

(39) Como hypado conceito de “bar de perfumes”, (...) (*Elle Brasil* 3, p.48)

(40) Modelo de algodão silkado Tenner, R\$26. (*Elle Brasil* 8, p.38)

(41) Macaquinho de toalha paetada. (*Vogue Brasil* 313, p.96)

(42) (...) bem que poderia ser uma jaqueta militar “paetizada”, não? (*Vogue Brasil* 312, p.20)

また、次の用例のように、接尾辞 *-ista* や *-eiro* が付与された用例も見られた。

(43) Calças largas demais, estilo skatista ou grunge, (...) (*Elle Brasil* 3, p.84)

(44) Poeta, roqueiro, sambista (apaixonado por Cartola), bluseiro (...) (*Vogue Brasil* 311, p.26)

(45) (...), coletânea com pensamento inspirados de 11 blogueiros. (*Elle Brasil* 8, p.65)

英語起源の *top* に縮小辞を形成する *-inho* が付与されているのが (46) と (47) であるが、(46) では、*top* が 1 音節として捉えられたために *-zinho* が付与され、反対に (47) では、*top(i)* のように 2 音節と捉えられたために *-inho* が付与されたのではないかと思われる。

(46) (...): biquininho, topinho, shortinho, sainha, camisetinha, (...) (*Vogue Brasil* 308,

p.73)

(47) Cansadas de nossas saínhas, blusínhas topzinhos, (...) (*Vogue Brasil* 310, p.26)

さらに、次の(48)や(49)の用例を見ると、top には意味上の同化も生じたと考えられる。

(48) A russa Natália Vodianova, atual número 1 no ranking das top, (...) (*Vogue Brasil* 307, p.14)

(49) Uma festa entre flores, proposta por Lúcio Vieira e Roberto Pena, da Escarlata, uma das floriculturas top de São Paulo, é pura sedução. (*Vogue Brasil* 306, p.178)

(50) Top, faixa em inglês, quer dizer topo, alto. Em moda é a roupa que está acima da cintura. (*Manequim*, 83 年 11 月, p.39, Freitas より引用)

Houaiss (2001) には「上半身に着る服」の語義ではすでに記載があるが、(48)の「トップモデル」や (49) の「トップクラス」の語義ではまだ記載がない。また、Freitas (1991) にも top の用例は (50) に見られるように衣服の意味でしかなく、さらにその概念がパラフレーズされているため、その頃に取り入れられた新しい外来語であろうと推測される。このようなことから、80 年代頃に取り入れられた top に、ここ数年で新たな意味が付加されたため、(48)と(49)の top は、意味借用が生じたケースだと言えるであろう。

4. ヨーロッパのポルトガル語における外来語

ブラジルとポルトガルでは同じ外来語が必ずしも同じ方法で取り入れられるわけではないことは既に述べた通りである。この点について Carvalho (1989) は以下のように述べている。

A língua portuguesa não é veículo de uma cultura uniforme – culturas diferenciadas nos continentes e nações onde a língua portuguesa foi adotada como língua oficial têm suas peculiaridades e preferências na adoção de termos estrangeiros. (Carvalho, 1989,

p.54)

(ポルトガル語は均一文化の伝達手段ではない。ポルトガル語が公用語として導入された大陸や国々はそれぞれ異なった文化を有し、外来語を取り入れるにあたっての特性や選好性もまたそれぞれ異なっている。)⁸

しかしながら、Faraco (2002) によると、先述したように、ヨーロッパのポルトガル語では英語起源の外来語があまり歓迎されない、あるいは、ブラジルのポルトガル語における外来語の氾濫について言及する際に、非常に極端ではあるものの、ヨーロッパのポルトガル語には英語起源の外来語が存在しないといったことまでもがしばしば口にされるようである。このような主張の真偽を確かめるため、ブラジルのポルトガル語を対象とした今回の調査と同種の調査をヨーロッパのポルトガル語にも行ってみた。80年代前後にヨーロッパのポルトガル語における外来語を調査した先行研究が手元にないためここ数年間の変化を観察することはできなかったが、*Vogue Brasil* や *Elle Brasil* と同時期にポルトガルで発行された *Vogue Portugal* と *Elle Portugal* を用い、ファッション分野におけるヨーロッパのポルトガル語の外来語を調査したところ表3の結果が得られた。

表3： *Vogue Portugal* と *Elle Portugal* におけるフランス語と英語起源の外来語の総数

	フランス語	英語
<i>Vogue Portugal</i>	114 (24%)	355 (76%)
<i>Elle Portugal</i>	37 (17%)	185 (83%)
計	151	540

* 括弧内の数値は割合 (%) を示す。

この結果から、いずれの雑誌でも英語起源の外来語の数がフランス語起源

の外来語の数を大幅に上回っていることが読み取れる。ブラジルと同様、ポルトガルにおいても、ファッション分野の外来語は、英語起源のものが多く取り入れられていることがわかる。ポルトガルはブラジルと比べて地理的にもフランスに近く、また国内でもフランス語教育が行われているにもかかわらず、英語の影響が強くなっていることが言語に反映されているものと思われる。

コーパスの用例の大部分は、ブラジルの用例と同様にほとんどが原語の形を維持していた。しかし、とりわけ *Vogue Portugal* でイタリック体や引用符といった表記上の措置が施されている割合が高かった点は特筆に値するであろう。*Vogue Portugal* では、英語起源の外来語全体のおよそ 96%、フランス語起源の外来語については、およそ 83%に何らかの表記上の措置がとられていた。この数値は、前述した *Vogue Brasil* における数値を大きく上回っている。一方、*Elle Portugal* の英語起源の外来語では、全体のおよそ 4%で、フランス語起源の外来語では、およそ 11%の使用があり、*Elle Portugal* と *Elle Brasil* ではほとんど差はなかった。

このように、ブラジルのコーパスと比較すると、ヨーロッパのポルトガル語では、外来語を外国語として認識し、自国語の語彙と区別しようとする傾向があるように見受けられた。これは、外来語は用いるものの、それらを自国語として用いることに対するある種の躊躇いの表れではないかと思われる。

5. おわりに

Freitas (1991) の調査と今回の調査を比較することにより、ファッション分野においてここ数年で英語がフランス語を凌駕していることが確認できた。従来フランス文化の影響が強かったファッション分野でさえもアメリカ文化の影響が拡大し、その現実が言語にも反映しているのであらうと思われる。

今回調査した女性ファッション誌では、大半の外来語が原語の形を維持していたが、それには2つの理由が考えられる。1つは、新しい語がまだポルトガル語に同化されていないためであり、もう1つは、鈴木 (1996) にも述

べられているように、政治的、経済的に影響力のある英語という威信を持つ言語に少しでも近づこうとする動きの表れだと考えられる。このような場合、外来語は、新しい事物に対する命名という本来の目的のためではなく、ある種のステータスの象徴として用いられているのではないかと思われる。

今回の調査ではフランス語起源と英語起源の外来語の数量的変化に焦点をあてたため、それぞれの用例を詳しく分析することはできなかった。今後は外来語の使用頻度や定着度に着目した調査と関連づけていく必要があると思われる。

注

1. 本稿は筆者の博士論文の一部をもとに加筆・修正したものである。
2. Carvalho (1989:16-18)
3. Carvalho (1989: 18-19, 54-56)
4. *Grande Dicionário* (2001) には gay も stress もすでに記載されている。stress については、stresse での見出しもある。ブラジルの辞書では、stress と estresse で見出しがあり、ブラジルとポルトガルでは同化方法が異なっている。
5. *Vogue* は、1892 年にアメリカ合衆国で創刊された女性ファッション誌で、ファッション界では最も古い雑誌の 1 つにあたる。また、*Elle* も同種の女性ファッション誌で、1945 年にフランスで創刊された。現在ではいずれの雑誌もブラジルやポルトガルを含む数多くの国々で月刊誌として発行されている。
6. 派生 (derivação) と複合 (composição) については様々な解釈を巡って常に議論が続いているが、本稿では詳しくは触れないことにする。ここでは Kehdi (2003) の定義にしたがい、前者を 1 つの語幹に接辞が付加されたもの、そして後者を 2 つ以上の語幹から形成されるものとする。
7. A produtividade deste sufixo é recente e cresce cada vez mais. Antes do século XX, registram-se pouquíssimas formações em “-iz(ar)”. (Monteiro 2002:177)

8. 原文からの和訳は筆者によるものである。

参考文献

石綿敏雄,『外来語の総合的研究』,東京堂出版,2001年。

河野彰,「在日ブラジル人のポルトガル語に見る日本語からの借用語」, 国立国語研究所,『日本語とポルトガル語(2): ブラジル人と日本人との接触場面』, p.53-92, 2000年。

田中建彦,『外来語とは何か-新語の由来・外来語の役割』,鳥影社,2002年。

ALVES, Jeda Maria. *Neologismo: criação lexical*. 2. ed. São Paulo: Ática, 2002.

———. *O Conceito de Neologia: da Descrição Lexical à Planificação Lingüística*. São Paulo: Alfa, 1996, p.11-16.

———. *A Integração dos Neologismos por Empréstimo ao Léxico Português*, São Paulo: Alfa, 1984, p.119-126.

———. *Um Estudo sobre a Neologia Lexical: os micro sistemas prefixais do português contemporâneo*. Tese (Livre-Docência) – Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas, USP, São Paulo, 2000.

———. *A Observação Sistemática da Neologia Lexical: Subsídios para o Estudo do Léxico*, São Paulo: Alfa, 2006, p.131-144.

BASILIO, Margarida. *Teoria Lexical*. 7. ed. São Paulo: Ática, 2003.

BECHARA, Evanildo. *Moderna Gramática Portuguesa*. 37. ed. rev. e aum. Rio de Janeiro: Editora Lucerna, 2003.

BIDERMAN, Maria Tereza Camargo. *Teoria Lingüística*. 2. ed. São Paulo: Martins Fontes, 2001.

———. *O sistema e a norma lingüística e a praxis das línguas de especialidade*. V Simpósio de Riterm 1996, México. <http://www.riterm.net/actes/5simposio/camargo.htm>. (accessed 2007-06-10).

BLOOMFIELD, Leonard. *Language*. New York: Henry Holt and Company, 1933.

- CÂMARA JR., Joaquim Mattoso. *Dicionário de Lingüística e Gramática*: referente à língua portuguesa. 24. ed. Petrópolis: Vozes, 1986.
- , *Estrutura da Língua Portuguesa*. 35. ed. Petrópolis: Vozes, 2002.
- , *Princípios de Lingüística Geral*: como Introdução aos Estudos Superiores da Língua Portuguesa. 4. ed. rev. e aum. Rio de Janeiro: Livraria Acadêmica, 1974.
- CARVALHO, Nelly. *Empréstimos Lingüísticos*. São Paulo: Ática, 1989.
- , *Publicidade*: a linguagem da sedução. São Paulo: Ática, 2002.
- , *O que é Neologismo?*. 2. ed. São Paulo: Brasiliense, 1987.
- , *O Léxico da Publicidade*. Tese (Doutorado em Lingüística) – Centro de Artes e Comunicação, UNPE, Recife, 1993.
- CASTELEIRO, João Malaca. *Dicionário da Língua Portuguesa contemporânea*. Lisboa: Editorial Verbo, 2001.
- CORREIA, Margarita; LEMOS, Lúcia San Payo. *Inovação Lexical em Português*. Lisboa: Edições Colibri, 2005.
- COSTA, Margarida Faria da; SILVA, Sofia Pereira da. *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*. Porto: Porto Editora, 2004.
- DUBOIS, Jean. et al. *Dicionário de Lingüística*. 8. ed. São Paulo: Cultrix, 2001.
- FARACO, Carlos Alberto. *Empréstimos e Neologismos*: uma breve visita histórica. São Paulo: Alfa, 2001, p.131-148.
- FARACO, Carlos Alberto et al. *Estrangeirismos*: guerras em torno da língua. 2. ed. São Paulo: Parábola, 2002.
- FERREIRA, Aurélio Buarque de Holanda. *Novo Aurélio - Século 21*. 3. ed. Rio de Janeiro: Nova Fronteira, 1999.
- FILHO, A. Tito. *Anglo-Norte Americanismos no Português do Brasil*. Rio de Janeiro: Nordica, 1986.
- FREITAS, Luiz Sílvia Márcia de. *Empréstimos*: um estudo sobre os processos de integração à língua portuguesa. Dissertação (Mestrado em Lingüística) – Faculdade de Ciências Humanas, UNESP, Araraquara, 1991.

- GUILBERT, Louis, *La Créativité Lexicale*, Paris: Librairie Larousse, 1975.
- HARMON, Ronaldo M. Aspectos lingüísticos dos empréstimos em português. *Hispania*, n. 77, p. 463-469, sept. 1994.
- HOUAISS, António. *Dicionário Houaiss da Língua Portuguesa*. Rio de Janeiro: Objetiva, 2001.
- KEHDI, Valter. *Morfemas do português*. 6. ed. São Paulo: Ática, 2003.
- , *Formação de Palavras em Português*. 3. ed. São Paulo: Ática, 2003.
- MATEUS, Maria Helena Mira; NASCIMENTO, Fernanda Bacelar. *A Língua Portuguesa em Mudança*. Lisboa: Editorial Caminho, 2005.
- MONTEIRO, José Lemos. *Morfologia Portuguesa*. 4. ed. Campinas: Pontes, 2002.
- SAUSSURE, Ferdinand de. *Curso de lingüística geral*. 25. ed. São Paulo: Cultrix, 2003.
- SONG, Zino. *An Invitation to Linguistics*. Tokyo: Nan'un-do, 1990.
- TAMURA, Takeshi. *Dictionnaire Français – Japonais Royal*. Tokyo: Obunsha, 1985.
- TORIL, Rena. *Os Processos de Integração dos Empréstimos Lingüísticos no Português*. Tese (Doutorado em Lingüística) – Faculdade de Ciências Humanas, UNESP, Araraquara, 2007.
- WEINREICH, Uriel. *Languages in Contact*. Tradução Takehiko Kandori. Tokyo: Iwanami, 1976.

参考資料

- VOGUE BRASIL. n. 306 – 309, São Paulo: Carta Editorial, 2003-2004.
- VOGUE PORTUGAL. n. 14 – 17, Lisboa: Edimoda, 2003- 2004,
- ELLE BRASIL. n. 3 – 8, São Paulo: Editora Abril, 2004.
- ELLE PORTUGAL. n. 186. – 191. Lisboa: Editora Proprietária, 2004.